

平成 27 年度 第 2 回 JSR 編集委員会 議事録

日 時：平成 27 年 10 月 22 日（木曜日）7：00 - 8：20

会 場：ANA クラウンプラザホテル富山 4 階 朱鷺 1・2

出席者：平林 茂（理事）、川口 善治（委員長）、青田 洋一、赤澤 努、石井 賢、伊東 学、
鈴木秀典（寒竹 司委員代理）、税田 和夫、高橋 寛、二階堂 琢也、長谷 斉、
長谷川 和宏、福岡 宗良

（以上委員、13 名）

三輪様（C B R）、尾島様（J S R 編集分室）、鈴木めぐみ（事務局）

（以上陪席、3 名）

欠席者：なし

・ 前回議事録確認

一同前回議事録の確認を行った。

川口委員長が、会議に先だち各学会担当雑誌の進捗等をヒアリングしたいとして、まず日本腰痛学会担当 二階堂委員に発言を求めた。また順番に発言を求めた。

二階堂委員（腰痛学会担当）：約 70 パーセントを採択率としている。

6 号担当の腰痛学会は、学術集会在 11 月であるため、JSR 投稿の締め切りは 12 月と非常にタイトなスケジュールであるため、今後も会員に呼びかけて投稿数が減らないようにしている。

長谷委員（JPSTSS 担当）：多くの論文を掲載したいため、約 75 パーセントを採択率としている。

赤澤委員（日本側彎症学会担当）：例年 20～30 編の投稿があったが、今年は投稿数 17 編で、掲載数は 14 編となった。

JSR とは無関係だが、会員から希望があったため、以前当学会で発刊していた『脊柱変形 VOL. 1～24』を学会ホームページ上の会員専用ページに PDF で公開した。

伊東委員（日本脊椎インストゥルメンテーション学会担当）：約 70 パーセントを採択率としているが、採用と不採用の中間の論文について、査読者にも意見を尋ね、このたびは質を重視ことにした。結果、投稿数 30 編、掲載数 19 編で採択率は 70 パーセントを下回

った。委員長を長谷川和宏委員から引き継いだばかりなので、次回より会員への投稿依頼等を周知徹底していきたい。

福岡委員（東海脊椎脊髄病研究会担当）：事務局を担当していた先生が病で倒れ、現状は会長の加藤先生（中部労災病院）に事務局を構えている。『JSR』誌とともに当研究会自前の雑誌の2本を編集しており、70パーセント程度の採択率で優秀なものを『JSR』誌に掲載するようにしているが、投稿数が不足気味であることが問題点である。2つの雑誌の投稿規程がそれぞれ違っていたが、今後統一されていく予定である。

高橋委員（日本低侵襲脊椎外科学会）：掲載数20編の約70パーセントを採択率としている。新技術についての論文であるためエビデンスに乏しく、そのため2名の査読者で意見が分かれることが多いが、その場合は編集長のほうで調整している。

事務局をドウ・コンベンションに委託しているが、編集のほうは委託していないため、査読者からのクレームなども編集委員長のもとに寄せられることになっている。なかには査読についての返事や対応をきちんとせずに再投稿してくる会員もあり、査読者からのクレームにつながっているため、このたびの編集後記でそのことについて書いた。

鈴木委員（西日本脊椎研究会）：特に問題なし。

次から議題に移った。

1. 各学会の第7巻分担金の確認

川口委員長が、例年各学会で分担している150万円について現状では変更しないことを確認した。

平林理事が、現状JSSRの資金が潤沢にあるため、今後は各学会の希望する100万円に近づくこともあるかもしれないが、未定であると説明した。

長谷川委員が、広告収入は現状いくらからいあるのかと質問し、川口委員長が1300万円程度であると回答した。平林理事が、広告収入は年々減る傾向にあるが、社会情勢や企業合併によるところが大きく委員会の努力不足という判断は理事会ではされていないと報告した。長谷川委員が、例年広告収入が減ってきている現状を明確にすると、各学会でも分担金について納得しやすいのではないかと意見を述べた。

2. 第7巻広告申し込み状況（資料1, 2）

川口委員長が、第7巻の広告申し込み状況について、例年表2・3を申し込んでいるアステラス製薬とファイザーからはまだ申し込みがなく、表3対向を申し込んでいるヤンセンファーマからは後付1ページでの申し込みがあったと説明した。

上記の3社については川口委員長が個人的にアプローチしてみるが、ほかにも3社についてコネクションがある委員がいれば、依頼してほしいと呼びかけ、二階堂委員がファイザーに依頼すると発言した。

また、川口委員長が2、3年申し込みのない企業については今年から委員による依頼を控えようと思うと提案し、事務局鈴木が昨年よりそのような方向性が示されていたとの報告がなされた。

以上より、2、3年申し込みのない企業を除き、例年通り、川口委員長が各委員にアプローチしてほしい企業の割り振ることになった。

3. 論文審査状況(資料3)

川口委員長が、論文の審査状況を説明した。5号について、6巻(今年)は編集委員会の英文原著論文としたが、7巻(来年)より主にJSSR 学術集会での優秀発表集にする予定と発言した。優秀発表については筆頭著者へ依頼しているが査読はあるので、査読でリジェクトとなった著者から厳しいのではないかと意見もあったと報告した。

川口委員長が尾島氏に、例年と比べて現状の投稿数等はどうかと尋ね、尾島氏が順調であると回答した。

4. 年間予定確認(資料4)

各号締め切り等、年間のスケジュールを確認した。

5. 在庫本の処理について

平林理事が、JSR 発送と在庫管理を担当している大日本印刷(株)より、理事会宛にJSRの在庫が膨大となったため在庫の処分を検討してほしいとの依頼があり、各学会に尋ねたところ、西日本脊椎研究会から各10冊~20冊の返却希望があり、腰痛学会から各1冊の返却希望があったが、それ以外の学会については廃棄で問題ないとの回答があったと説明した。

本日の理事会で報告後、実施していく。

6. JSR 以前の論文の on line 化

平林理事が、JSR 以前の全論文を on line 化してはどうかとの意見が川口委員長からあり、CBR 社に見積もりを依頼したところ高額であったため、再度 on line 化する部分を絞り(タイトルから抄録まで)見積もりを依頼していると説明した。

赤澤委員が、側彎症学会で『脊柱変形』誌を会員専用ホームページへPDF 公開したが、業者に見積もりを依頼したところ、文字検索できない様式(PDF 掲載)か検索できる様式(現在の電子版 JSR 掲載の様式)で見積額が異なり、PDF 掲載であれば24冊でも40万円程度であったと報告した。

川口委員長が、本件については予算がつけば行っていきたいと考えているが委員会としてはどうかと問い、一同川口委員長の意見に賛同した。

7. 英文雑誌作成の進捗状況

平林理事が、本日の理事会に編集委員会で推薦した2社が来て英文雑誌作成についてプレゼンテーションをすることになっていると説明した。インパクトファクターがつけられるものにすることと、オープンアクセスであることについてはすでに理事会の承認を得ていると追加説明した。

伊東委員が、英文投稿に当たっては、安くネイティブによる校閲をしてくれる業者を学会で指定してあると、若い先生方が投稿しやすいのではないかと提案した。川口委員長が、本日プレゼンを行う1社については編集局内で校閲してくれることになっているが、もう1社はどうかと高橋委員に問い、高橋委員がもう1社も内科学会の英文誌なども編集している業者であるため問題ないと考えたと回答した。本件については、平林理事が理事会でのプレゼンで業者に質問し、確証を得ることになった。

また、平林理事が雑誌のタイトルについては理事会内（メール会議）で検討し、現状は持田理事長が提案した『Journal of Spine Surgery and Related Research（略称 JSSRR）』が有力であると説明した。

石井委員が、海外のインパクトファクターのついた有力誌は短いタイトルのものが多いのもう少し検討したほうがよいのではないかと意見を述べた。

川口委員長が、JAPANESE をはずして、略称『SSRR』などはどうかと提案した。

長谷川委員長が、個性を出すためにも JAPANESE は必要に感じると意見を述べた。

平林理事が、理事会へは、編集委員会からの意見として「個性が感じられる短めのタイトルが好ましい」と伝えるとまとめた。

川口委員長が、英文雑誌ができる際、現在の『JSR』誌や JSR 編集委員会はどうなるかについて以下のように説明した。

- 1) 現状の『JSR』誌はそのまま継続する。『JSR』誌は現状同様の和文と英文のハイブリッド誌となるが、だんだんに英文は英文誌のほうへ投稿されるようになるだろう
- 2) JSR 編集委員会とは別に、英文雑誌の編集委員会が創設される
- 3) 英文雑誌の編集委員には、英文雑誌について詳しい先生が就任する（JSR 編集委員会からもメンバーが選出される可能性がある）
- 4) インパクトファクターがつく雑誌で、メドラインにも掲載される予定
- 5) オープンアクセスのため、何号に何本掲載するといった制約がなく、掲載すべき論文の投稿があれば時を選ばず掲載できる

長谷川委員が、若い先生方の投稿のモチベーションが上がりそうだと意見を述べた。

8. その他

[投稿規程の引用論文数について]

高橋委員が、投稿規程にある「引用論文10まで」の制約について、それを守っていない投稿者が多いので、投稿規程を修正したほうがよいのではないかと提案した。

伊東委員が、レビューペーパーなどには制限は設けないほうがよいが、ケースレポートにはほとんど引用論文はないはずなので、「10程度」などとぼかすか、原著論文、ケースレポート、レビューペーパーなどの内容によって数を変えたほうがよいのではないかと提案した。

CBR 三輪氏が、引用論文数が多くなるとページ数が増える恐れがあり、もし30の引用論文があると単純に1ページ増えると説明した。

平林理事が、1編の論文のページ数と掲載数を1号あたりのページ数で割って出した数字であるため、多くなりすぎるのは問題である（超過金が発生）と発言した。

長谷委員が、5ページになると1ページ分掲載料が著者負担になり、その分については払いたくないとした投稿者がいて問題になったことがあったと報告した。また、引用論文をきちんと出したい投稿者もいるので、投稿論文上の記載もアバウトにしておいたほうがよいのではないかと。

川口委員長が、投稿規程の修正については検討していくが、内容（原著論文、ケースレポート、レビュー）によって、引用論文の掲載制約を変更するのがよいように思うとまとめた。

[投稿取り下げの論文について]

論文審査状況について、平林理事が青田委員の施設の会員から取り下げがあったようだが理由はなにかと問い、青田委員が投稿者は大学院を出たばかりの会員で投稿の仕方を理解しておらず完成していないものを出していたため取り下げたと回答した。

[次回委員会開催]

次回の委員会開催について、川口委員長が4月の幕張で開催されるJSSR 学術集會会期中を予定しており、それが平林理事と川口委員長の2期4年の最後の委員会となると説明した。ただ、JSR 編集委員会については、各学会からの編集委員長で構成されているのでほぼ変更はない予定と補足した。

以上